

# ソシュールの文法観

興津達朗

## Saussure's View of Grammar

Tatsuro OKITSU

### まえがき

Martin Joos は1950年代のアメリカ言語学界における、ソシュールに対する見方を批判して、「今日におけるソシュールの地位は、演劇におけるイプセンのそれであり、時折言及されても儀礼的なものにすぎない」<sup>1)</sup>とやっているが、これはアメリカ構造言語学が、まだ勢力を保っていた当時の状況を示すものとして、意義ぶかい。ある意味では、Bloomfield, Sapir 以来のアメリカ構造言語学は、ソシュールの観念主義を、記述主義、物理主義 (physicalism) によって再構築しようとする努力の一例であったとも言えよう。

しかし、周知のようにアメリカでは1950年代の末期から、Chomsky の変形文法が出現し、それにとまってソシュールは、新たな脚光を浴びるようになった。日本は、戦前からヨーロッパの言語学と深いかわりを持ち、ソシュール研究の伝統は築かれていたが、戦後はアメリカ構造言語学の影響を直接うけてきた。最近になって、わが国にもソシュールの復興が叫ばれていることが注目される。<sup>2)</sup>

欧米を始め、世界的な構造主義、変形文法の隆盛の中にあって、ソシュール研究の成果には著しいものがある。R. ゴデル編『ソシュール一般言語学講義原資料』(1957)<sup>3)</sup>は、ソシュール原著の成立事情を明らかにし、その難解さを解くのに役立つし、R. エングラー『一般言語学講義校訂版』(1967)<sup>4)</sup>はソシュール解釈への基準を与えてくれる。

この小論は、私のまったくの覚え書きにすぎないが、今後の研究のための一つのステップとして、とくにソシュールの文法観（主として彼の原書第二篇「共時言語学」にもとづいて）についての、私なりの考え方をまとめてみた。なお、本論中の引用文は、小林英夫『ソシュール一般言語学講義』(1940)の改版第10刷(1981)によっている。

### 言語分析の原点

言語分析の二要素として、ソシュールは、観念 (idea) と音 (sound) とを提示し、両者の結合状態の考察に意をそそぐ。この両者は、一方が他方に先行して生起するというのではなく（その場合は、音を先行させると形態主義となり、観念を先行させると論理主義になる）、一方の分明化に応じて他方も分明化し、こうした相互限定によって、始めて結合が完成するとみている。彼の言によれば、「いささか神秘めくが、「観念・音」は区分を内含し、言語は二つの無定形のかたまりのあいだに成立しつつ、その単位をつくりあげているのである」(p. 158)。この一種の神秘的な合一は、たとえてみれば、水面に風によって生じた波のようである。われわれは、波の素因としての風と水とを区別することはできない。

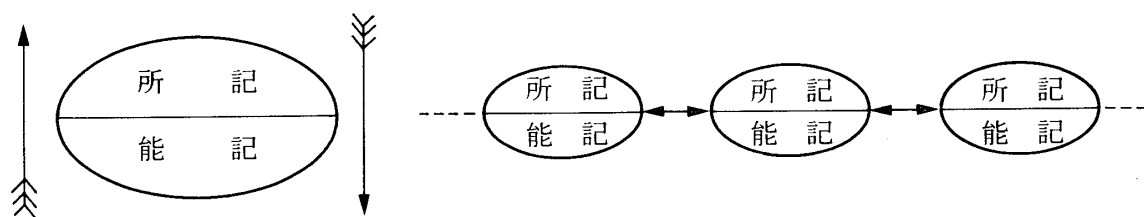
ソシュールは、観念と音との相互限定性について さらに考察を加え、両者の結合がその神秘性が示しがちなように、必然性によるものではなく、むしろ恣意性 (arbitrariness) によることを強調している。これは、言語の結合が外的な関連化 (たとえば、形態主義、論理主義) によるのではなく、言語自体のもつ内的特性によることを示している。また、恣意性の論拠が、個人を超えた社会慣習、規範すなわち社会性にあることは言うまでもない。ソシュールの言語研究の基底をなす原点が、観念と音との相互限定性にあること、およびこの定理からの系としての言語の恣意性を重視していることは、これからの論述を進める上で、きわめて重要である。

### 恣意性の制限

しかし、ソシュールは後述しているように (pp. 182-186)、恣意性にある制限を加える。言語の結合は恣意性を原則とするとしても、言語実態に則して見るならば、その原理の限界をみとめざるをえない。絶対的恣意性に対する相対的恣意性が存在するのであり、さらには有縁性 (motivation) がみとめられる。英語の clerk に比べると farmer (Cf. teacher, runner, worker) には相対的恣意性があり、フランス語の vingt 'twenty' と dix-neuf 'nineteen' とはともに恣意的にみえるが、両者には程度の差がある。前者が絶対的であるのに対して、後者には、たとえば、dix 'ten', neuf 'nine', vingt-neuf 'twenty-nine', dix-huit 'eighteen' soixante-dix 'seventy' などと関連づけられる有縁性がある。この点からも明らかのように、ソシュールの言語分析の原点には、言語研究のための方法論的考察が加えられており、まず一つの観念的な原点すなわち仮定を設置しておき、それが言語事実に照らして、いかに見現され、修正されるかを考察する方法がとられる。これは、言語科学において必須の研究条件であって、Chomsky の「言語能力」(competence) と「言語運用」(performance) の設定に通じる所があると言えよう。

### 語内関係と語間関係

ソシュールは、次に語内の関係と語間の関係とを峻別する。これも周知の図式化によって示せば、下図のようである。



語内においては、能記 (signified) は所記 (signified) の「つがい」(counterpart) として、所記は能記のつがいとして相互依存の関係にあり、一方だけの存在はみとめられない。ソシュールが、ここで観念のかわりに所記を、音のかわりに能記を使用しているのは、両者の関係およびそれらと記号 (sign) との関係をより緊密化するためである。観念と音とは、それぞれの「資料的」意義よりも相互依存の機能的意義が重視される。両者のこの合一性と対立性とを明示するためには、所記 (意味されるもの)、能記 (意味するもの) の機能が資料的意義に優先する。両者は、この機能的合一性を通して、全体としての記号すなわち語と結合する。図式化において、語内の関係化は上下の矢印で、語間の関係化は水平の矢印で示されているが、この二つの関係化の本質的相違については後述することとする。ここでは、この異質性を克服し、両関係

の「橋わたし」として、ソシュールが価値論を導入していることが注目される。

### 価 値 観

ソシュールは、経済学概念である「価値」(value)を借用しているが、彼によれば、すべての価値は、次の二つの逆説的な要素から成立している。

- (1) その価値を決めようとしているもの(A)と交換可能な別のもの(B)〔交換性〕
- (2) その価値を決めようとしているもの(A)と比較可能な同類のもの(A', A'', A'''...)〔可算性〕

たとえば、五フランは(1)別のもの、パンの一定量と交換可能であり、(2)同一の貨幣体系内の同類貨、たとえば一フラン貨と、または異った貨幣体系の貨幣たとえばドル貨と、比較または換算可能である。この原理を言語に適用するならば、語のもつ音は別ものである意味と交換可能であり、かつ同類の他の語と比較可能である。言いかえると、語の意義 (signification) はそれ自体として万全なのではなく、その語を取りかこみ、それと対立している他の同類語との比較、関連によって始めて、その真意すなわち価値が確定される。たとえば、the sun (太陽) の真意は、この語単独には確定できない。かならず、この語をかこむ同類語との比較、関連が必要であることは、to sit in the sun (日なた) の例をみれば明らかである。フランス語の mouton は英語の sheep と同じ意義をもつが、価値はちがう。英語には食用の「羊肉」を表わす mutton があるが、フランス語にはない。これは、英語には同類語としての sheep と mutton とがあり、そこから各語に価値が分有されていることを示す。二例とも、語の真意を確定するには、語内関係よりも語間関係が優位にあることを示しているが、同類語が形成する語間関係とは、語間環境ということであり、ソシュールは後述するように、この環境を心的なもの(記憶による)と線条的なもの(発話)とに二分する(Cf.それぞれ上例の二つ)。しかし、ここでは、まだ両者を区別しないで論述していることは、「外的」環境を示すのに、“outside and around”(p.163)という用語を使用していることにも明らかである。

### 言語の消極性と積極性

語内関係と語間関係との相違、関連を示すために、意味の側面に属する二つの例をあげたが、同様な例は、音すなわち形態面からもあげることができる。チェコ語の žena ‘woman’ (主格単数) について格連結をしらべてみると、ženu (対格単数), ženy (主格複数), žen (属格複数) となる。ここで注目すべきことは、他の格と比べてみて、最後の žen には格の差異を表示すべき、積極的な (positive) 形態特性が付与されていないこと。すなわちゼロということである。チェコ語における žen (: žena) の機能は、この言語の初期における ženb (: žena) の時と全く同一である。この例からも明らかのように、言語においては差違 (difference) だけあればよいということである (Cf. 現代言語学における「有標」(marked), 「無標」(unmarked))。

差異は、最低二個から始まって、制限はないわけだが、実際には、この例の格のように、一と組 (set) をなすのであり、この組の典型として音韻体系がある。音韻体系には、有限個の差異すなわち音韻が存在し、それら是对立的 (opposing), 相対的 (relative) かつ消極的 (negative) である。ソシュールの言語研究の特色は、語内関係をその消極性において把握し、所記、能記が形成する単位 (unit) すなわち語によって作られる語間関係を、その積極性において把えるこ

とである。語間環境のもつ積極性、優位性については、すでに価値観の項において述べた所である。われわれの次の関連的関心は、共時態次元における言語の連合および統合関係についてである。

### 統合関係と連合関係

ソシュールは、その著書の随所において、言語研究者が到達した言語分析法と、その言語を母国語とする原語民 (native speaker) が意識的、無意識的にもっている国語観との一致、不一致に言及している。彼の理想は、もちろん両者が合致するまで研究方法を洗練することである (Cf. p. 192)。この観点からみたとき、ソシュールが語内関係と語間関係との関連性の解明のために、経済学から借用した価値論を活用し、またこれから述べるように心理学的な統合、連合の両関係の原理を応用して、原語民がもっている言語直観に迫ろうとする彼の研究態度が注目される。

彼によれば、統合関係 (syntagmatic relation) とは、言語の線条性 (linearity) にもとづく語の連結を意味し、たとえば語句を形成する *re-lire* 're-read', *contre tous* 'against everyone', *la vie humaine* 'human life' から始まって文をなす *Dieu est bon* 'God is good', *S'il fait beau temps, nous sortirons* 'If the weather is nice, we'll go out' などすべてが同一の関係を示している。これに対して連合関係 (associative relation) とは、記憶の中になんらかの共通点にもとづいて組成された諸関係を示し、たとえば *enseignement* 'teaching' は(1)語幹に関しては *enseigner* 'teach', *renseigner* 'acquaint', (2)接尾辞に関しては *armement* 'armament', *changement* 'amendment' (3)語義に関しては *éducation* 'education', *apprentissage* 'apprenticeship' などと連合している。

この二つの関係の著るしい相違点または対立点は、(1)連合が目にもみえない「潜在的」(in absentia) なのに対して、統合は「顕在的」(in praesentia) であること。(2)前者が記憶にもとづくのに対して、後者は発話の場において連想によって行われるものであること。すなわち前者の実現が後者となることである。

### 合理的文法の基点

ソシュールは、まず伝統文法における語形論 (accidence) または形態論 (morphology) と統語論 (syntax) の二分割を批判して、伝統文法は形態主義を主体として、実用性を加えた便宜的文法であるとみている。語形論で語の形態的分類を一括して行ない、統語論でそれらの語の形成する機能を取り扱うことは、学習文法としては効果的であっても、これでは所記と能記との合一性を見失うことになり、言語の本質が把握できない。彼が新しい文法の基本原則として採用するのは、上述の連合、統合関係である。この原理こそ、言語自体に内在する機能にもとづく二分法だからである。この原理によって、語形論、統語論 (さらには語彙論 (lexicology) を加えた所) の伝統的な二 (三) 区分法を打破して、各分野を一貫する分析法が確立されることになる。この分析法が、言語一般の分野だけでなく、とくに文法領域に有効に適用できることは、次の例が示している。フランス語の *grand* [grā] 'big' の用法は、その統合、連合の枠組みにおいてこの語を分析することで記述は、あます所なく完了する。統合的に、この語は *grand garçon* [grā garsō] 'big boy', *grand enfant* [grāt āfā] 'big baby' の二つの発音形態で実現し、連合的には男性形 *grand* [grā], 女性形 *grande* [grād] の二つがあるだけである。

## 文法における抽象的実在体

ソシュールは文法体系を構成するために、文法のもつ抽象化または抽象的実在体, (abstract entities) を最高度に活用する。抽象的実在体は、具体的実在体 (concrete entities) に対比される。後者は語内関係において、所記と能記とが分離状態にあっては、抽象的資料にすぎないが、両者の合一において始めて心的存在としても、その実在性 (reality) を得ることを示すが、これに対して前者は、一時的にせよ具体性を離れてそれ自体として存在し、活動できる能力を示す。文法がこの抽象化を可能にするからである。次に、文法の連合、統合の各分野において、抽象的実在体がいかに働いているかをしらべることにする。

### 連合的抽象化

連合的にみるならば、文法内には、もちろん形態の共通性にもとづいて組成される部分があり、その規則的な組成が文法の大部分をなしていると言える<sup>5)</sup> 語群、名詞、動詞または形容詞の語尾変化、語幹、接尾辞などの類別などがこれである。しかし、連合は語の場合と同様、文法の場合も多様でたとえば次のような文法範疇を形成して行く、形態的には無関係でも、機能的に、同一視されるべき部分がある。これは、始めの形態のみによる類別に比べると、抽象化された実在体をなす。たとえば、ラテン語 *domin-ī, rēg-is, ros-ārum* は形態的には、同一の語尾をもってはいないが、「属格」(genitive case) として一括され、抽象化される。言いかえると、形態的関連性の有無よりは、同一の文法機能としての「価値」が優先する。もし、さらに一連の語、*domin-us, domin-ī, domin-ō* と比較してみると、より高次の抽象化が得られる。すなわち、*dominī* は、この一連の語の中で、主格、対格に対して属格の位置をしめるものであり、これは「格」として、より高次の抽象化である。さらに高次の次元としては、格を有するすべての名詞を一括した「品詞」がある。

このように、文法とはより高い次元に向っての限りない拡大であり、価値の抽象化である<sup>6)</sup>。しかし、ソシュールは、このような抽象化すなわち生成法を無制限に許してはいない。すべての抽象化は、その基盤に一連の具体的関連語（たとえば、上の例のように）をもっている。ソシュールの表現によれば「しかし眼目は、抽象的実在体は、ひっきよう必ず、具体的実在体にもとづくということである」(p. 192)

### 統合的抽象化

統合における抽象的実在体としてソシュールは、語順 (word order) を設定する。後述するように、語順研究はソシュール以後さらに進展するが、その重要性およびその抽象性を強調する点において彼はユニークである。フランス語 *Je dois 'I must'* と *Dois je ? 'Must I ?'* において、それぞれの文意すなわち価値は各構成語によって決定されるのではなく、それらの具体語の配列の対立によってである。英語の *pain-ful*、ラテン語の *signi-fer* の意味を決定するのは、これらの語を構成する各部分ではなく、非存在の *ful-pain, fer-signum* という語順との対比によるとソシュールはみる。

語順の、このような抽象性は他言語の構造と比較することによって、さらに明確になる。並置された英語の *gooseberry wine* 「グスベリ酒」、*gold watch* 「金時計」はフランス語の *vin de groseilles, montre en or* に比べると、文法的機能と形態との結合物（フランス語では、前置詞 *de, en* で示されているが）を欠く点において、より抽象的であり、後者はより具体的であ

7) さらに、フランス語、英語の次の例：Je cueille une fleur 'I pick a flower' では、ラテン語などでは具体的に対格語尾で表わされる文法的機能（直接目的語に担当する）が、動詞のあとの位置 (position) に対応している。

これらの例よりもさらに語順の抽象性の本質を示すものとして、ソシュールは次のような例をあげている。この例は文法的機能と形態との結合物に対応するものを全く欠く点において前例とは異なっている。The man I have seen. この句が対応物を欠いていること、すなわち「ゼロ対応」であることは、フランス語の例、l'homme que j'ai vu と比べてみると明らかになる。フランス語の que 'that' にあたる語が英語にはないからである。しかし、ソシュールは、ここでその言語自体に則した内的文法ではなく、他言語の構造との比較による外的文法（彼の用語によれば、具体的な「有体」に対して「無体の」(incorporeal) 文法(p. 193))の借用を否定していることが、注目される。彼によれば、外的な比較文法をこの例に適用すれば、「無が何ものかを表わす」(Nothing means something) という不合理をみとめざるを得なくなると言っている(p. 191)。ひるがえって、外国語を知らない原語民が、この例を始めとする高度の抽象的実在体を理解し、活用するという言語事実は、いかに解釈すべきだろうか？ ソシュールの答えは、語順のもつ(1)具体的単位と(2)その配列である。すなわち、原語民の言語直観は、これらの具体的手がかりに反応し、これらを活用して、語順のもつ抽象的実在体を把握するとみられる。ここにおいても、連合におけると同様（次元と関連化はちがうか）、抽象性と具体性との関連性がうかがわれる。ソシュールの文法観の基盤はここにある。現代言語学の用語で言うならば、ソシュールは語順において、表層構造と深層構造とを重ね合わせている<sup>8)</sup>。この二元論は、結局さきに示した、言語分析の原点としての観念と音との神秘的合一性に還元される。さらに、ソシュールによれば、この合一性の背後には、彼が記号学 (semiology) を彼の言語観の基点としているという事由が存在する。

## ま と め

ソシュールの語順の分析法は、一と口で言えば、抽象性と具体性の関連にもとづく観念主義であり、二元論的である。これに対して、ソシュール以後の現代の語順研究は、両者の区別を排除し、もっぱら具体性にもとづく形態主義、記述主義で、一元論的傾向をもつものであった。Sweet にはまだ、ソシュール同様、比較言語学的考察が残っており、言語を二分して屈折語尾をもつ、語順の「自由な」(free order) 言語と、語順の「固定的な」(fixed order) 現代語とに分けており、同じ現代語の中でも、副詞は他の品詞に比べて自由な順序を保存しているとみる<sup>9)</sup>。Jespersen は、語順研究において動詞中心で、主語がその前後にくる、二つの場合 (VS または SV) を出発点としており、また「識別的な」(glottic) 文 (たとえば、平叙文——疑問文) と文体的な文 (たとえば、強調による倒置) とを問わず、すべてを扱っている<sup>10)</sup>。Bloomfield は、一語の前後に生起可能な文法的形態から始まって、句、文のような単位になって始めて具現する文法的形態を一律に「位置」(position) の視点から処理しようとしている (たとえば、apple には s がついて、apples ともなり、その前には、an (a ではなく)、the のグループが現われることができるし、さらに The apple tastes sour の定動詞形態が出現する<sup>11)</sup>。彼の位置の原理から語句、文さらには音声面 (音声学、音素論) をも含んで、すべての言語現象を「分布」(distribution) で処理しようとする新ブルームフィールド学脈への道はそう遠くはなかった。アメリカ構造言語学の枠組みを(1)要素の設定、(2)それら要素相互間の分布記述という分析手順を反復使用することで完成したのは、Harris であった<sup>12)</sup>。

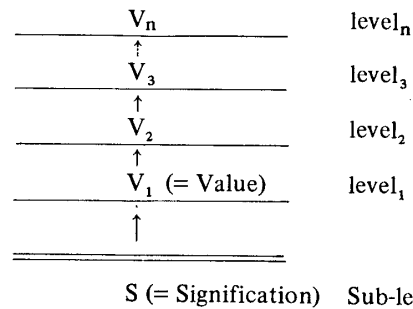
アメリカ構造言語学の分布主義を否定し、その「分類言語学」(taxonomy) に対して新しい変形文法を創造したのは、Harris の指導の下にあった Chomsky である。彼はソシュールの研究について「分節化と分類の手順および統合的、連合的(系列的 (paradigmatic)<sup>13)</sup> 分布に依存すること自体は、広く一般的に行われている。とくに、ソシュール、イエルクスレフ、ハリスを参照せよ。」と言っている。<sup>14)</sup> Chomsky がソシュールと Harris とを、ともに分布主義者として同一視している点は、以上論述してきた所からも明らかなように、そのまま受け入れるわけにはいかないが、この引用文を含む文脈における彼の意図は、これらの分類言語学的モデルに対して、次に彼独自の変形文法を提示することにあった。変形文法をソシュール流にみたならば、どう解釈できるだろうか？ 一つの見方は、Chomsky はソシュールの具体性と抽象性との相互限定性を切断して、もっぱら、限りない抽象化を許す方法論を探求し、実験してきたと言えよう。また、連合、統合の両者に含まれている抽象化あるいは生成化をいかに結合するかに腐心したとも言えるかもしれない。ソシュールが連合、統合の関連化に止まった限り、彼の研究の基盤は連想 (association) にあったのに対して、無限の抽象化、生成化を求める Chomsky は、創造 (creativity) を基盤としてきた。ここに、構造主義と生成主義とのちがひがある。

われわれが、ソシュールの言語観、文法観に関心をもつのは、二十世紀の現代言語学の始祖としてのフェルディナン・ド・ソシュールの言語研究の中に、その後発展してやまない構造主義および変形文法の萌芽、原型がすでに含まれているからであり、かつそれらが彼の言語理論の中で、一定の調和または相互性 (interplay) を保っているのではないかとみられるからである。

#### 注

- 1) Joos, M. (ed.); *Readings in linguistics: the development of descriptive linguistics since 1925*, 18, Washington: American Council of Learned Societies (1957)
  - 2) ソシュール研究のための図書目録として最近のものには、たとえば菅田茂明「ソシュールの基本図書」、『言語』, 7・3, (1978); E.F.K. ケルナー著, 山中桂一著『ソシュールの言語論』大修館(1982)の「参考文献」などがある。
  - 3) Godel, R.; *Les sources manuscrites du Cours de linguistique générale de Ferdinand de Saussure*, Geneva: Droz (1957)
  - 4) Engler, R.; *Critical edition of the Cours de linguistique générale*, Wiesbaden: O. Harrassowitz (1967)
  - 5) 形態の規則性と不規則性について Bloomfield は「きいたことがなくても作れるのが」規則形, 「きいたことがなければ作れないのが」不規則形と言っている (Bloomfield, *Language* (1933) p.274). たとえば, walked, baked, talked は前者で, took, broke, went は後者(でない, taked, breaked, goed になってしまう). このような構成法の比較において, 前者は「項目・配列方式」(item and arrangement, 略して IA), 後者は「項目・過程方式」(item and process, 略して IP) と称せられる. 上例において, IA は walked に適用できるが (walked = walk (形態素) + ed (形態素) の配列), took には適用できない. この分析のためには, そこに現存しない項目を導入して, take + past → took のような生成過程法をとらざるを得ない.
- Chomsky は言語現象は大部分が IA によるが, 言語生成の基盤は, むしろ IP にあるとして, IA と IP とを合体した, より強力な生成法の探究につとめる.
- (Cf. Chomsky, *Syntactic structures* (1957), p.23, p.58, fn. 8)

6) 「価値の抽象化」を図式化すれば次のように表わすことができよう。



7) 同一言語内において、「抽象的」、「具体的」に相当する例を、たとえば Chomsky, (1957) pp.88-89 の例文で示せば次のようなものがある。

- (a) The shooting of the hunters      (b) The hunters shoot (the bear).  
 (c) They shoot the hunters.

(a)は(b), (c)に比べてより「抽象的」、後者はより「具体的」。

8) 注7)の例について、Chomsky 流に言えば、(a)が表層構造であり、具体的とみられる(b), (c)が、(a)の基底にある深層構造をなす。すなわち、(a)には(b), (c)の深層構造が含まれている。なお、本論中に示された the man I have seen を I have seen the man と比べてみると、両者はそれぞれ O + S + V と S + V + O で表わされる。ともにO (objectivity; 目的語性)に関する用法であるが、本論に述べたように、ソシュールによれば、V + Oは語順に具現されるが、O + S (+V)はゼロ表示である。記述的 (descriptive) には、Oに関する二つの場合を示すものとして処理されるが(もっとも、後者は関係詞を含むものとしてさらに分析が可能だが)、両者をなんらかの方法を用いて関連化しようとするれば、両者に共通な核文または深層構造を求めなければならない。ここにも、ソシュールの分析法と Chomsky のそれとの比較が可能になる。

- 9) Sweet, H.; *A new English grammar*, II, 2 Oxford: Clarendon (1948)  
 10) Jespersen, O.: *A modern English grammar*, VII, 53-90 Copenhagen: E. Munksgaard (1949)  
 11) Bloomfield, L.; "Meaning" *Monatshefte für Deutschen Unterricht* 35, 101-106; Hockett, C. (ed.); *A Leonard Bloomfield anthology*, 402-403. Bloomington: Indiana Univ. Press (1970)  
 12) Harris, Z.; *Methods in structural linguistics*, 6 Chicago: Univ. of Chicago Press (1951)  
 13) ソシュールの連合——統合において、前者のもつ心理性は、ソシュール以後の記述主義、物理主義によって批判されるようになり、連合的のかわりに「系列的」(paradigmatic)が使用されるようになった。  
 14) Chomsky, N.; *Current issues in linguistic theory*, 11 The Hague: Mouton (1972)